

食物窃取行為に見られる奴隸の意識

A Study of the Mind of Slaves As Seen by Their Thievery of Food

- I はじめに
- II 奴隸制の歴史的な性格——その変容について
- III 食物窃取の動機及びその背後の意識
- IV 食物窃取の歴史的意味
 - (i) 連帯意識の形成
 - (ii) 人間的主体性の再生へ向けて——可能性と限界
- V 結びにかえて

沼 岡 努
Tsutomu Numaoka

I はじめに

優に2世紀以上存続した合衆国南部奴隷制の歴史において、奴隷が他人の所有物を秘かに盗み取るいわゆる「窃取」行為は、年代、地域に殆ど係わりなく比較的容易に見出すことができる。当時の奴隷所有者の日記や私信、南部旅行家による手記、南部地方紙、奴隷の自伝、また元奴隷に対するインタビュー記録等、種々の史料はこうした奴隷による窃取行為が常習的に生起したことを伝えている。とりわけ奴隷が自分の農場の貯蔵庫から食物を奪い取る行為は、あたかも「プランテーション生活の標準的特徴」⁽¹⁾の様相を呈し、奴隷生活の一部に組み込まれているかのようにであった⁽²⁾。

第2次大戦以降今日まで、奴隷制史家たちは半ば行動様式化されたこの窃取行為を、一般に、逃亡、反乱、奴隷主に対する暴力や毒殺、怠業、仮病、農機具の破壊などと等しく、奴隷制や主人に対する奴隷の一抵抗形態として位置付けてきた⁽³⁾。しかしながら、奴隷による窃取行為は、人間的当為の格闘ともいふべき自由獲得のための生命を賭けた逃亡や、暴動、反乱、主人に対する暴力・毒殺といった非日常的で過激な抵抗行為に比べ、その意味付けが十分に、また体系的に行なわれてこなかったように思われるのである。いわば奴隷制の水面下で常習的に発生していた消極的・間接的な抵抗行為であっただけに、反乱や暴動などに比して、奴隷主階級を始め、南部白人社会に与えた直接的衝撃・影響が微弱であったという点は確かに否めない⁽⁴⁾。だが、奴隷による窃取行為は平均的奴隷の抵抗意識の具体的表出のまさに典型として理解されるべきなのであり⁽⁵⁾、それ故に奴隷全体の奴隷主または奴隷制に対する抵抗意識のあり方を評価する上で不可欠な分析対象といえるのである。

この小論の狙いは、次の幾つかの疑問に答えることにある。すなわち、一抵抗形態として位置付けられてきた窃取行為は奴隷のいかなる動機によってなされたものであったか、とりわけその動機の根底に確固として存在した彼らの意識とはどのようなものであったか、また、窃取行為は奴隷たちに何をもたらしたのか、更には制度としての奴隷制は窃取奴隷の内面にいかなる影響を及ぼし

たのか、などである。

考察の範囲は19世紀アンティ・ベラム期とする。その理由は大まかに言って2つある。1つは、この時代においてこそ南部奴隷制経済は著しい発展の様相を見せたのであり、また黒人奴隷の世界においても、この時代は彼らがアフリカの文化的源泉と南部での奴隷としての厳しい試練の両者から生み出した独自の文化をそれ以前にもまして発展させていった時であった。従って、アンティ・ベラム期南部奴隷制の理解は、南部奴隷制の歴史的展開の本質的解明につながるものと考えられる。もう1つは、奴隷制の歴史的 성격の問題と関連する。奴隷による窃取行為を分析する場合、当然その行為の発生母体である奴隷制の性格を無視することはできない。奴隷の内面は勿論のこと、彼らの行動は奴隷制の性格によりかなりの影響を受けていたからである。それ故、奴隷制の性格が17世紀前半より19世紀60年代の崩壊期に至る時間的経過の中において一定不変であったかどうかという点は極めて重要である。本論で明らかにされるであろうが、19世紀アンティ・ベラム期の奴隷制はそれ以前の奴隷制とはかなりその性格を異にしていたと捉えられるのである。

本稿を奴隷制という試練の「内面史」(the inner history) 確立へ向けての一試論としたい。

Ⅱ 奴隷制の歴史的 성격——その変容について

U・B・フィリップス (Ulrich B. Phillips)、ケネス・スタンプ (Kenneth M. Stamp)、スタンリ・M・エルキンズ (Stanley M. Elkins) を始め、奴隷制を包括的に扱った奴隷制史家の殆どがこれまで奴隷制を非歴史的制度として、すなわち時間的経過による影響を全く受けない静態的な制度として描いてきた。例えば、初期の奴隷制研究に決定的な足跡を刻んだフィリップスは、名著『アメリカの黒人奴隷制』(*American Negro Slavery: A Survey of the Supply, Employment and Control of Negro Labor as Determined by the Plantation*

Regime, 1918) において奴隷制の経済的、社会的、文化的諸問題を体系的に論じたが、それらの叙述のあり方は年代学的クロノロジカルというよりはむしろテーマ別であった⁽¹⁾。だが、ウィリー・ローズ (Willie Lee Rose) が『奴隷制と自由』(*Slavery and Freedom*, 1982) と題する書の中でいみじくも指摘しているように、「250年近く存在した制度を始めから終わりまで全く同じ制度として扱うことほど愚かなことはない」のである⁽²⁾。奴隷制を変化と発展の相において捉える基本的立場から分析することによって、はじめて奴隷による窃取行為の歴史的意味が真に問われるものと考えられるのである。そこで以下本章においては、奴隷による窃取行為分析の前提として、果たして奴隷制が2世紀以上にわたるその歴史において、いかなる性格的変容を遂げたか検討してみたい。

考察に入る前に、これまでの奴隷制の性格研究について少しふれておこう。奴隷制の性格に関する研究は比較史的アプローチから奴隷制研究が活発化してゆく中で注目を集めてきた問題の1つである。歴史家はもとより、隣接諸科学の研究者たちもその解明に加わってきた。彼らは新世界のある2地域の奴隷制を様々な角度から比較分析し、奴隷制の性格を規定したと考えられる決定要因を析出してきたのである。しかし、その見解は一樣ではない。本国の文化が新大陸植民地の奴隷制の特徴、性格を形づくったとする文化的要因説、本国の政府や教会が奴隷制の運営に及ぼした影響力を重視する制度的要因説、利潤追求を奴隷制の最大目的とし、それを奴隷制の本質として捉える経済的要因説、奴隷制の存在する植民地社会の政治を掌握していた支配者層の特性を最重要視する政治的要因説、その他、人口構成的要因説や地理的要因説等も提示されてきた⁽³⁾。このように奴隷制の性格決定要因としては様々な可能性が考えられるのであるが、これらの諸説を検討して気付くことは、奴隷制の性格を不変のものとして、つまり奴隷制が存続した全期間中、その性格は何ら変わるところがなかったとして把握する傾向が著しいという点である。このことを指摘して、合衆国南部奴隷制の性格を特に次の2点に注目しながら見てゆくことにする。その2点とは、白人、とりわけ経済的、政治的、社会的権力を掌握していたプランター階級のイデオロギーないしは世界観の体現とみなし得る「奴隷法」

(Slave Codes) を始めとする各州法、及び主人の奴隷に対する実際上の態度、扱いである⁽⁴⁾。

では先ず始めに、白人、とりわけ奴隷主の完全な支配権を保証しようとする目的から、南部奴隷制社会に植民地時代からアンティ・ベラム期を通じて存在した奴隷法について見てゆくことにする。奴隷法は、奴隷主階級、特にプランター階級の奴隷に対する自らの基本的認識を法的に表明したものとして理解できるのであるが、その核心は、奴隷に主人への絶対的服従と全ての白人に対する尊敬の念を要求している点にあった⁽⁵⁾。しかし、規定上の表現や内容を見ると、それが時代と共に変わっていったことがわかるのである⁽⁶⁾。

奴隷法の時代的差異に注目する時、われわれは18世紀の奴隷法と19世紀のそれとの間に顕著な相違が認められることに気付くのである。それは、端的に言うならば、18世紀の奴隷法には奴隷を財産として位置付け、容赦なき厳格さ、残虐性を示す言葉が際立っているのに対して、19世紀、特にアンティ・ベラム期の奴隷法には奴隷を法的に人間として確立する傾向が明確に読み取れる、ということである。ケネス・スタンプは、『奇妙な制度』(*The Peculiar Institution: Slavery in the Ante-Bellum South*, 1956)の中で植民地時代の奴隷法に触れ、「植民地時代初期の奴隷法では〔白人による〕奴隷殺害の罪に対しては極く軽い刑罰しか与えなかった。全く罰則のない場合もあった」と述べているが、19世紀との相対的比較で捉えれば、奴隷は植民地時代全体を通じて殆ど変わりなく厳しい、残忍なまでの法的拘束下に置かれていたと解して差し支えないであろう⁽⁷⁾。

18世紀奴隷法には奴隷殺害以外にも、例えば、法律を犯した奴隷の四肢切断が認められていたり、奴隷が白人に対して手をあげた場合には、「その反抗が当事者の宣誓によって証明されれば、〔奴隷は〕その都度、裸体の背に30鞭の処罰を受ける」と規定されていた⁽⁸⁾。また、奴隷が重罪、死罪事件を起こした場合においてさえ、大抵どの植民地にも定められていた「迅速かつ簡便に奴隷を処罰、処刑するための法律」規定に従い、略式裁判や即決裁判方式によって実に簡単に裁かれたのであった⁽⁹⁾。しかしその一方で、生活の最も基礎的

要件である衣食住に関しては奴隷主が奴隷に対して守らなければならない責務は全く明示されてはいなかった。

ところが、19世紀に入ると、特に30年代以降には、18世紀に見られたような奴隷に対する残虐な処罰規定は徐々に廃止ないしは緩和されていった⁽¹⁰⁾。烙印、耳削ぎ、四肢切断等は19世紀半ばには全ての州や地方で「廃止されていた訳ではなかったが、数の上ではかなり減って」いた⁽¹¹⁾。裁判のやり方も19世紀には奴隷が死罪で告訴された場合、「奴隷に対して正規の法廷で陪審による審理を行なう」ようになった⁽¹²⁾。重罪に関してもこの権利は幾つかの州で認められた。18世紀の厳格な法律は徐々に人間的なものに改善されてゆき、明確にあるいは暗黙に奴隷の人間性、人格的要素を認めるような条文が並存するようになった。一例を挙げれば、1852年のアラバマ州の奴隷に関する法典では、奴隷の二元的性格を認める2つの条文が並置されている。第1箇条は、財産としての奴隷の身分を規定し、奴隷の「時間、労働、労務」に対する所有者の権利及びあらゆる適法な命令に奴隷を服従させる所有者の権利を明記している。これに対して、第2箇条は、人間としての奴隷の身分を認めている。すなわち、主人が自己の所有する奴隷に対して慈愛を持ち、十分な食物、衣類を与え、病氣中や老後にあっては保護を与えることを奴隷主の義務としているのである⁽¹³⁾。奴隷に対する衣食住の提供に関して奴隷主の何ら特別な法的責任も存在しなかった植民地時代の状況を考え合わせると、この第2箇条の条文は、奴隷が物的対象から自身の権利の主体になり得る人間としての地位にまで法的に引き上げられたことを示すものであったと言えよう。

奴隷の人格的存在を明確に肯定した法的実例は、各州裁判所記録の中にも多数見出される。1859年、ルイジアナ州のある法廷は奴隷が自州の法律では「財産として、また同時に人間として扱われている」ことを明言している⁽¹⁴⁾。また、所有奴隷の解放を約束した遺言内容をめぐり、親子の間で裁判にまで発展した1846年テネシー州の事例では、次のような判決が下されている。

「奴隷は馬と同じ身分ではない。・・・奴隷は創造主である神の姿そっくり

りにつくられている。奴隷には精神的諸能力があり、またその本性には不滅の本質がそなわっている。それらは、もしも奴隷が運命のいたずらによって思いもよらぬ境遇に置かれるということがなかったならば、奴隷をその所有者と平等にするにふさわしい資質である。・・・法律といえども・・・奴隷のその高貴な本性を消し去ることはできないし、また人間の数々の生得的権利を剝奪することもできないのである。⁽¹⁵⁾」

奴隷州のこうした法律や判例が示しているように、19世紀アンティ・ベラム期において奴隷は法的に人格的要素を与えられたのであった。しかし、このような身分規定は、物であると同時に人間であるという奴隷の「二元的性格」(dual character)を認めるものであった⁽¹⁶⁾。このことは、南部人とりわけ奴隷主階級が奴隷を経済的価値を有する財産と規定していたにもかかわらず、徐々に、理性や人格を具えた社会的存在として認知せざるを得ない状況に陥っていったことを物語っている。奴隷主はこうした自己撞着の解決策として、法律を「予備のもの」(a reserve)、「非常事態に使用するための道具」(an instrument for emergency use)として温存し、奴隷に関して現実に生起する多くの事柄を「法律の外に置き」、自身の権威と権力において処理してゆく道を選んだのであった⁽¹⁷⁾。だが、現実に奴隷の処遇をめぐり様々な難問と取り組んでいく過程で、奴隷主は奴隷の人格的要素を認めつつ、しかも彼らを完全に隷従せしめる必要性から、次第に奴隷たちを「子供」、それも「決して大人にはならないよう期待された子供⁽¹⁸⁾」として位置付けるようになり、以下にみるような温情主義的態度を戦略とした支配従属形態へと方向転換していくのであった。

さて、以上見てきたような法規定の存在は必ずしもその施行を意味した訳ではない。不完全ながらも法規定に明記された奴隷の人間としての権利が直ちに奴隷主によって現実に付与されたとは限らないからである。そこで次に、奴隷主の奴隷に対する実際上の態度、扱い方を見ていくことにする。

奴隷に対する奴隷主の態度や反応の実態分析は、それが18世紀から19世紀へ

の世紀転換期から1830年頃までの間にかなりはっきりと変わっていったことを明らかにする。少々大雑把な捉え方ではあるが、18世紀末までは概して奴隷主は奴隷の生活環境の改善や幸福といった問題よりは主要商品作物ステイブル・クロップスの生育状況により大きな関心を寄せていたのであった。奴隷主のこうした経済的利害への多大な関心は17、18世紀奴隷制の1つの大きな特徴と考えられるが、このような奴隷主の関心は奴隷の肉体に対する無頓着さ、酷使、虐待、体刑を現実のものとしたのであった⁽¹⁹⁾。奴隷を所有する事に対しては特別感傷的な思考、行為も存在しなかった。彼らは奴隷をただ「不運で不幸な野蛮人」(luckless, unfortunate barbarians)とみなし、何よりも経済的搾取の対象として捉えた⁽²⁰⁾。このため、大部分の奴隷主はその意識において奴隷を自らの利害の敵対者と位置付け、それ故に「奴隷たちの抵抗能力、抵抗願望を決して過小評価」することなく、絶えず彼らの抵抗を警戒し、またその半面、恐れもしたのであった⁽²¹⁾。18世紀の奴隷制はこのように経済的搾取を目的とする過酷な労働制度としての性格が強く、奴隷は生産の単なる一要素でしかなかった。

とは言え、18世紀の奴隷主たちが農場経営者としてのみならず、家長としても精励した点は否めない。しかし、彼らは前者の立場を重んじるあまり、また新大陸に連れて来られてまだ日も浅く馴化不十分な奴隷たちの最高責任監督者としての立場上、往々にして冷静且つ残忍な家長として奴隷を支配統制せざるを得ない状況に陥ったのであった⁽²²⁾。18世紀南部奴隷制の性格を「家父長的」(patriarchal)と捉える立場もあるが、この時代において「家父長的」とは、あくまでも主人の「権威」(authority)、「命令」(order)、それに対する奴隷の「ひたすらな服従」⁽²³⁾ (unswerving obedience)、すなわち徹底した主従関係を意味する言葉として把握されるべきであって、決して父親が自分の子供に対して示す思いやり、親切心、愛情といった父親的感情を中核概念とする言葉としては理解するべきではないのである。

さて、19世紀も30年代に入ると、フロンティアは西方へと後退し、プランターの生活面にも規則性が見られるようになっていった。近隣プランター同士の互惠関係が徐々に確立されていくと同時に、プランター家族の血縁網もより

広範な地域へと拡大、浸透してゆき、核家族の枠を超えて「大勢の親戚——おば、おじ、姪、甥、いとこなど——を」も家成員として包含し得るかなり弾力的構造を持った一種拡大家族の構成員相互の社会的活動・交流が活発に行なわれ、一大家族の紐帯、感情的絆が強化されていった⁽²⁴⁾。そして、このような社会的人間関係や血縁網の発達は、奴隷主の奴隷に対する態度を次第に「温情主義的な」(paternalistic)ものに変えていくことになった。プランター社会においては世論が圧倒的な力を有し、法律が成し遂げられないことも世論がやっのける傾向にあった。プランターたちは、自分の所有する奴隷が最も待遇が良く、人間的に扱われているという評判、社会的評価を切望し、またそれを何よりの名誉と考えたのである⁽²⁵⁾。だが、言うまでもなく、奴隷主に温情主義的態度を取らせるようになった最大の要因は、既に指摘したように、奴隷主が奴隷の人格的要素を無視することができなくなり、かといって奴隷の絶対的隷従を放棄する訳にもいかず、結局彼らを永久的に「子供」のごとく支配隷属しようとした点にあった⁽²⁶⁾。それだけに、19世紀、とりわけアンティ・ベラム期南部奴隷制の主人＝奴隷関係の性格を次第に規定していったこの「温情主義」(paternalism)は、主人が奴隷に対して一方的に与える慈愛、同情、親切心、優しさなどの感情とは殆ど関係のないものであった。奴隷主が奴隷制という搾取制度を支配統制し、自己の存在を正当化する必要性から生み出したものだったからである。しかしながら、今述べたように、奴隷の人格的要素を認めながら彼らを絶対服従させる必要性から、表面的には奴隷に対して物質的・精神的援助、保護を温情的態度の下に与えることになった点は否定できない。

19世紀に南部各地のプランテーションを訪れた旅行家たちは、18世紀にはかなり頻繁に見られた激しい鞭打ちや残酷な拷問の場面を、また「奴隷がろくに衣服を身につけていなかったり、食事を十分に取っていない」光景をそれほど頻繁に目撃することはなかった⁽²⁷⁾。また、主人や女主人が所有奴隷の結婚或いは宗教的至福について大きな関心を持つようになったのも19世紀に入ってからのことであった⁽²⁸⁾。特に奴隷の信仰問題に関して付言すれば、1830年頃から奴隷をキリスト教徒に改宗させようとする動きが南部において徐々に高まり、

1840年代中頃からは奴隸主による奴隸の積極的な「宗教的指導」(religious instruction)が展開していった。その動機は複雑で、奴隸主個々人による差異も大きかった。奴隸に対するこうした宗教的指導を、奴隸主が奴隸制を「奴隸たちにとってより我慢できるものにする」ことにより、自らの安全性や奴隸制社会の支配を確固たるものにしようとした一方策、戦略であったとみることも勿論できるが、そればかりではなかった。奴隸主による奴隸の改宗的努力は、次第に「より強力な道徳的傾向を帯びて」ゆき、魂の救済、異教徒アフリカ人の教化、徳性の向上等を自らの使命としたからである⁽²⁹⁾。奴隸に対する改宗的努力の中に奴隸主のキリスト教的良心、利他主義と奴隸支配上の彼らの利己主義的考えがそれぞれどの程度混ざり合っていたかを析出するのは殆ど不可能であろう。しかし、少なくとも両者間に18世紀には見られなかったような感情の交流などが醸成されていったことは明白である。かくして、主人＝奴隸関係は主要商品作物の生産を媒体とする単なる経済的関係を超え、温情主義的感情を基調とする社会的関係に入っていたのであった。

以上で南部奴隸制の歴史的性格の変容をごく大雑把に概観し得たとすれば、考察の結果は概ね次のとおりである。すなわち、18世紀南部奴隸制においては、奴隸は法的に財産として規定され、奴隸主による実際上の扱いもそうした法規定との整合性が認められた。奴隸労働においては過酷性が、奴隸犯罪に対しては言語に絶するような残虐性が見られた。このような非人間的扱いは、奴隸主が奴隸を経済的価値を有する物とみなし、自己の飽くなき利潤追求のために可能な限り搾取しようとしたからであった。このため、家長としての奴隸主の立場は、奴隸との感情的つながり、相互理解を求めようとするよりはむしろ、支配＝従属関係を徹底させる方向へと向かっていったのであった。故に、18世紀奴隸制は、経済的搾取を第1目的とした労働奴隸制であり、主人の奴隸に対する関係という点から捉えれば、厳格で徹底した家父長制的奴隸制と言えるであろう。これに対し、19世紀アンティ・ベラム期の奴隸制も本質的には利潤追求を目的とした労働制度ではあったが、法的にも、また現実の奴隸との関係においても奴隸主は奴隸の人間性がある程度認めざるを得ない状況に陥った。この

ため、従来の鞭打ちに代表される物理的強制力以上に奴隷主にとっては奴隷に対して施す「温情」が支配統制手段として重要な意味を持つようになっていった。主人＝奴隷関係は次第に温情主義を中核とする家父長制的性格を強めていき、奴隷制の制度そのものも労働制度という経済的性格から、白人家族と黒人奴隷が「温情」によって奇妙に複雑に結ばれた家庭、すなわち一種の社会制度としての性格を有するようになっていった。

Ⅲ 食物窃取の動機及びその背後の意識

前章の考察から明らかなように、アンティ・ベラム南部奴隷制は、主要商品作物の生産を目的とした経済制度という点では本質的に変わりはないものの、この物質的生産上の基本的関係とも言える主人＝奴隷関係においては大きな変化が見られたのであった。それは端的に言えば、単なる経済的生産関係から「温情主義」を中核的要素とする社会的関係への移行といえることができる。

しかし、新たに形成されたこの両者の関係の中核的要素「温情主義」とは、他者への純粹な思いやり、優しさ、慈愛などの感情からは程遠い、奴隷主による打算的な奴隷支配・統制上の戦術を意味するものであった。奴隷主は奴隷たちに彼らの物質的、精神的生活全般にわたり、援助や保護を、また場合によっては指導を温情主義的態度の装いの下に与え、その見返りとして彼らの絶対的服従、忠実なる労働を当然の義務として要求した。しかし一方、奴隷たちは、奴隷主による様々な物質的援助や親切な行為を「自分たちが忠実に尽くした労働に対して当然与えられるべきもの」、すなわち権利として受け止めたのであった⁽¹⁾。かくして、主人、奴隷間にはあらゆるレベルにおいて意識の交差、衝突が見られ、絶えず緊張がみなぎり、その結果、取引や妥協が暗黙裡に行なわれることとなった。19世紀にはこうした「重苦しい」(stifling) 温情主義が奴隷支配・統制上の重要な戦術として18世紀の鞭打ちに代表される体刑に取って

代わったのであった⁽²⁾。それ故、奴隷による窃取行為は、19世紀においては奴隷主とのこうした緊張を孕んだ複雑な意識の相互作用を内在化した、いわば動態的均衡関係の土壌の中で産み落されたものとして捉えられなければならない。このことを念頭に置きながら、以下具体的な考察に入ることにしよう。

奴隷が窃取行為を頻繁に行なったという事実は、奴隷の^{ナラティブ}聞き書き記録や自伝を始めとする種々の奴隷側史料から比較的容易に知り得る。例えば、1850年頃テキサス州に生まれたスーザン・メリットという奴隷は、毎日曜日に与えられる配給食料が待ち切れず、「多数の奴隷が・・・〔奴隷小屋から〕こっそり抜け出し、鶏を盗んだためにひどく鞭打たれた」と証言している。また、1847年アラバマ州に奴隷として生まれたサラ・フィッツパトリックは、奴隷による窃取行為について当時の模様を次のように伝えている。「殆どすべての『黒ん坊たち』は奴隷制時代、よく盗みを働いたものでした。彼らが主人や女主人から盗んだ物は大半が食物でした・・・。食べる物が十分に手に入らないような時には、どんな『黒ん坊』でも盗んだものです。」サウス・カロライナ州の元奴隷M・E・エイブラムズはインタビューに対して、「わたしたちは土曜日の夜毎に豚を盗み、それを小峡谷へ運んで調理の下ごしらえをし、よくバーベキューにしたものでした」と語っている⁽³⁾。更に、1835年頃サウス・カロライナ州ウォードマロー島に奴隷として生まれたプリンス・スミスは、「自分のいたプランテーションでは、奴隷たちは彼〔主人〕から物を盗む必要性は全くありませんでした。というのは、彼〔主人〕はわたしたちが物に不自由しないようにしていたからなのです」（傍点引用者）と語っているが、この種の証言は、奴隷制社会においては食物窃取がかなり普遍的に見られた現象であったということを逆に示唆しているものと解されよう⁽⁴⁾。^{スレイヴ・ナラティブ}奴隷体験記の史料的价值を主唱したギルバート・オゾフスキー（Gilbert Osofsky）も「主人について——奴隷体験記の意義」（*Puttin' On Ole Massa: The Significance of Slave Narratives*）と題する論文の中で、奴隷たちにとっては詐欺や騙しが生き延びてゆく上で社会的に有用な武器となり、その現実的行為の多くが食物窃取であった点を指摘した上で、体験記の中には「文字通り何百ものこうした〔窃取

の] 話しが載っているのである」と述べ、窃取行為の常習性を支持している⁽⁵⁾。われわれはこうした奴隷の直接的証言や研究者の言から、窃取行為の実態に関して概ね次のような輪郭を得ることができるのである。すなわち、奴隷による窃取行為は、第1に、それが常習的に生起したということ、第2に、その行為が殆どすべて奴隷主を対象としてなされたということ、そして第3として、盗品の圧倒的多数が食料品であったという点である。本稿において奴隷が奴隷主から食料を盗み取る行為、すなわち食物窃取行為を分析の対象に絞る所以はここにある。

奴隷側の史料の示すところでは、奴隷による盗品食料は実に様々であった。中でも、豚や鶏を始め、とうもろこし、さつまいも、塩漬けの豚肉、ハムやベーコンなどの燻製品等はかなり頻繁に盗まれたとあって差し支えない。一方、それほど頻繁ではなかったにしても、牛肉、羊肉、七面鳥、じゃがいも、小麦、卵、かぼちゃ、プラム、西瓜、糖蜜、その他入手可能な食料は何でも窃取の対象とみなされたのであった⁽⁶⁾。ではこのような食物窃取行為の背後には一体奴隷たちのいかなる意識が隠されていたのであろうか。彼らを食物窃取へと駆り立てた直接的原因、すなわち動機と、その根底にあった彼らの意識を以下探してみたい。

先ず最初に動機について考えてみよう。食物窃取の動機について真っ先に指摘しなければならないのは、配給食料の量的不足という点である。配給食料に関しては従来、研究者たちは概して、奴隷が自己の労働力を再生産するのに果たしてそれが十分であったか否かという問題を栄養学的観点から論じてきたように思われる⁽⁷⁾。しかし、そのような客観的分析の結果いかににかかわらず、奴隷たちの絶えざる空腹感が彼らに豚小屋やとうもろこし貯蔵庫に夜襲をかけさせたという厳然たる事実が存在するのである。奴隷の主観的立場から食物の問題を分析したエスコットは、奴隷の大半が「食事は量的には十分与えられた」と語っているとしているが、配給食料が量的に不十分であると感じていた奴隷の生の証言を決して無視することはできない⁽⁸⁾。「空腹の時は、見つけた物は何であれ取ったものです」と1840年に生まれたテネシー州在住の元奴隷ロ

バート・フォールズはインタビューに答えているが、この種の証言は聞き書き資料の中に容易に見出されるのである⁽⁹⁾。また、教会の牧師や巡回説教師が対奴隷宗教的指導の一環として広く行なった説諭の中で、「主人の物を盗むべからず」という言葉を繰り返し奴隷に執拗に言い聞かせたにもかかわらず、「盗まなければ食べてはいけなかった」と告白する元奴隷たちの言葉には彼らの置かれた状況が端的に表れている⁽¹⁰⁾。

だがここで一つ注意しておかなければならないのは、配給食料に量的不足を感じた奴隷たちだけが食物を盗んだ訳ではなかったという点である。奴隷たちは、量的のみならず質的にも常食に対して強い関心を示し、より豊かな食事を求めて食物窃取を繰り返したのであった。前述のように、豚、鶏、塩漬けの豚肉、ハム、ベーコンなどがよく盗まれたのもこのことと決して無関係ではない。ジョージア州の奴隷ピアス・コウディの証言によれば、「鶏や新鮮な肉類などは祭日に出される品目であり、それ以外の時には楽しんで味わうということは殆どなかった」のであった⁽¹¹⁾。比較的良い食事に恵まれながらも、「極上の食べ物は白人たちから盗まなければならなかった、と語ったテキサス州の奴隷ウォルター・リムの言葉や、主人の家畜を盗んで殺し、それを売却して得た金で配給食料では手に入らない砂糖、コーヒー等を購入したとするJ・T・ティムズの述懐談は、明らかに奴隷たちが質的に豊かな食事を求めていたことを物語っている⁽¹²⁾。このことから奴隷による食物窃取は、配給食料の量ないし質に対する不満を動機とした行為として捉えられるであろう。しかしながら、奴隷側の史料を注意深く読み進めていくと、窃取という行為が奴隷たちの単なる生理的要求からくるものではなく、彼らの奴隷という身分に対する自己認識のあり方や労働意識と不可分の関係にあるということに気付くのである。

奴隷の聞き書き記録や自伝は、奴隷たち隷属者の世界には白人自由社会とは異質な彼ら独自の道德体系や論理が存在したことを伝えている。具体的に言えば、奴隷主やその家族から彼らの財産を「盗んだ」場合、奴隷世界においてはその行為は「盗み」(stealing)とはみなされずに、単に「取ること」(taking)と解されたのである。ジョージア州フォーサイスのプランテーションで奴隷と

して過ごしたジョージ・イースンは、奴隷主の燻製小屋に夜襲をかけたことに言及し、そうした行為は「主人や奴隷監督には盗み（stealing）とみなされたが、彼ら〔奴隷たち〕には自分たち自身が働き出したものを単に取ること（taking）でしかなかった」と語っている^{（13）}。また先に引用したアラバマのフィッツパトリックは次のように端的に述べている。「当時『黒ん坊たち』は盗み（stealin'）をそんなに悪いこととは考えていませんでした。事実、彼らはそれを盗み（stealin'）とは呼ばずに取ること（takin'）と呼んでいました。^{（14）}」

言うまでもなく、これは単なる言葉上の問題ではない。彼らの言葉には、罪の意識も道徳的責任も殆ど感じられないからである。換言すれば、このことは、彼らが窃取行為を自己正当化していたことを意味する。この点について、1840年代に自由を獲得した逃亡奴隷ヘンリー・ビブ、フレデリック・ダグラスは他の奴隷たちを代弁しつつ、自らの立場を次のように説明している。

「奴隷には自分の必要なものは何であれ、飲み食いしたり、着たりできる道徳的権利があると思うし、また手の届くような所に食べ物や着る物が豊富にあるような国において、耐え苦しみ、餓死してしまうとしたら、それは奴隷側の咎といえるだろう。わたしは、自分が取ったものに対しては自分の正当な権利があったのだと考える。なぜなら、それはわたし自身の手による労働生産物だったからだ。もし、わたしが自由な国で自由人として隣人から物を取ったりすれば、わたしは神に誓って自分自身を悪事を働いた罪深い者と考えるだろう。^{（15）}」

「率直なところ、わたしは盗みのような行為はどのようなことであれ、それ自体実にいやなことでしたが、それでもやはり空腹の時などは食べ物が見つければ所構わずそれを取ることに躊躇しませんでした。それに、このようなことをただ訳もわからず本能の向くまま行なった訳でもなかったのです。道徳的権利というものをはっきりとわきまえた上で行なったことなのです。

・・・わたしは、自分の労働と人格がトーマス主人のものであり、自分の生

活必需品——それはわたしが自分で働いて獲得したものなのですが——も主人によって奪われているという事実を考えた時、わたし自身のものをわたし自身に与える権利を導き出すのは簡単なことでした。・・・それは移動の問題——主人の肉をある桶から取り出し、別の桶の中に入れるということではなかったのです。こうした取り扱いにより肉の所有権が影響を受けることはありませんでした。最初主人はそれを桶の中に所有し、最後にそれをわたしの体の中に所有したのです。」「自由社会の道德律は奴隷社会には適用することができないのです。・・・人を奴隷にすると、あなたはその人から道德的責任を奪うことになるのです。⁽¹⁶⁾」(傍点原文イタリック体)

これらの証言は、奴隷がいかにして窃取行為を正当化したか、彼らの論理を考える上で2つの重要な点を含んでいる。第1は、奴隷身分と道德的責任に関してである。すなわち、奴隷たちは奴隷化されたことによってそれ以前自由社会において負わされていたいかなる道德的責任からも解放された、故に白人自由社会の道德律を遵守する必要性は皆無である、と解釈したのである。中にはダグラスのように、黒人奴隷化を永続化しようとする白人の論理を逆手に取り、もしも自分が主人の動産チャットルというのであれば、食物窃取は「主人の財産の一部を主人の他の財産の一部」に移し変える「移動の問題」でしかないとする達見を示した奴隷もいたが、認識の程度に多少の差こそあれ、奴隷は総じて白人世界の道德律を拒絶する態度を見せたのであった⁽¹⁷⁾。更に重要な点は、彼らのこうした意識が人間を奴隷化した白人たちの背德的行為の故に、自分たち奴隷は白人自由社会の道德律など一切守る必要はないとする彼らなりの論理、換言すれば、白人社会に体する反発、抵抗の論理と一体化していたという点である。日頃奴隷たちに嘘をつくな、物を盗むなと諭している白人たちが「なぜわたしの母や祖母を盗んだのか」、最初の窃取行為は「白人たちが黒人を盗んだあのアフリカにおいて」ではなかったか、と鋭い洞察力により奴隷たちは白人の犯した道德的偽善、背德的行為に対して峻烈な批判者の立場を取ったのである⁽¹⁸⁾。この考え方が窃取行為正当化のまさに論理的根拠を成したのであった。

第2は、奴隷の労働意識に関してである。これは、第1点目の白人社会の道徳的責任の拒絶に比して奴隷がおしなべて明確な認識の下に窃取行為の正当化を試みたものであったと言えよう。それは初めは実に素朴な意識には相違なかったが、南部奴隷制という自己完結的閉鎖社会の中で過酷な労役を通して徐々に意識化されていった奴隷労働の仕組みそのものに対する根本的認知であった。彼らは奴隷制というものが「奴隷が労働をし、プランターがその利益を獲得する⁽¹⁹⁾」制度であり、自分たちは「懸命に働くが何の利益も得ない⁽²⁰⁾」存在でしかないという点、これに対して奴隷主は、「働かずに他人の労働に依存して生活している者たち⁽²¹⁾」であるという厳然たる事実を日々の労働経験の中から着実に学び取っていったのであった。それは徹底した自己利益追求者としての奴隷主観の内面化以外の何物でもなかった。しかし同時にこの意識は、逆に奴隷たちに、主人の繁栄と安逸の源泉は自分たちの労働そのものにあるとの確信を抱かせ、ひいては自己の労働成果に対する正当な権利を自己認識させたのであった⁽²²⁾。それは、労働の成果は労働する者の権利であると主張した先のビブの明快な見解に示されており、また、配給食料を^{ギフト}施し物としてではなく、労働交換物、すなわち自己の労働との引替として当然獲得する権利のあるものとみなした次のような奴隷の言葉によっても明らかである。「彼ら〔奴隷主たち〕は〔奴隷たちが〕配給食料を得るために働かなければ奴隷たちには決して何も与えませんでした。だから、それ〔主人から与えられた配給食料〕は彼ら〔奴隷たち〕の取り分（portion）だったのです。⁽²³⁾」（傍点引用者）南部各地の奴隷制の実態を観察して回った精力的な旅行家として知られる北部人フレデリック・オームステッド（Frederick Law Olmsted）もヴァージニアでの生活体験から次のように説明している。プランテーションでは至る所で「農業的観念が黒人の倫理体系の基礎となっているのだ。つまり、労働成果は労働する者の権利に属しており、この理由から、信心深い者たちでさえも主人の（Massa's）財産を自分たちのために使用することを正当的だとしているのだ。⁽²⁴⁾」そして、このような労働する者の権利が保証されない場合に、彼らは「取ること」の実践の内に自らの権利を奴隷主たちに知らしめたのであっ

た。

ところで、奴隷の労働意識に関連して是非とも指摘しておかなければならない点は、奴隷の労働生産物に対する権利意識の発達に果たしたいわゆる「菜園」(garden plots or provision grounds)の役割である。旧南部の大部分の奴隷たちは、奴隷主から与えられた一区画の土地を、家族の常食不足分を補充する目的で家畜の飼育や野菜栽培を行なうことを許可されていた。彼らはこの自家菜園を過酷な一日の労働の後、「月明かりを頼りに」耕作したり、労役から解放される土曜の夕方ないしは日曜日に手入れをしたのであった⁽²⁵⁾。奴隷たちの菜園に取り組むこの積極的姿勢はその収穫高に反映した。一般に、彼らは余剰農産物を生み出したのであるが、それはプランテーション内部での奴隷主との小取引によって、また村や町などの近傍市場におけるプア・ホワイトとの取引により、別の品物と物物交換されたり換金されたりした⁽²⁶⁾。こうした奴隷による慣行は、他の新大陸奴隷制との比較で言うと、例えばジャマイカに見られた「菜園」⁽²⁷⁾(palinkas)ほど大規模な歴史的展開の様相を見せることはなかったし、またそれほど社会的影響力を持つには至らなかったが、少なくとも奴隷たちに所有・権利意識や自律精神を植え付ける上で積極的要因として作用したと言える。これまで奴隷には財産権が賦与されていなかったということで、彼らには所有権に対する意識が著しく欠如していたと見なされてきたが、菜園またそこから上がる生産物や収益金に対する彼らの行状は、明らかに奴隷に「疑似『私有財産』権」⁽²⁸⁾(a quasi-right to a 'peculium')が慣習上認められ、且つその権利を奴隷自身が認識していたことを物語っている。1845年のノース・カロライナ最高裁におけるワディル対マーティン訴訟事件に対する判決は、こうした奴隷の権利を法律が明確に認めた典型的な例であると言えよう。C・J・ラフィン判事は、奴隷には財産所有権が法的には認められていないが、生産物に対する権利は「ノース・カロライナの殆どどこにも普遍的に見られる極めて有益な慣習である」としたのであった⁽²⁹⁾。奴隷たちは奴隷主が「特権」として与えた菜園をそこから上がる生産物も含めて「権利」とみなすようになり、更にはこの権利意識を菜園という枠を超え、奴隷主所有のプランテー

ジョン全体にまで拡大解釈し、自己の労働生産物に対する権利を主張していったのであった。

以上のように、奴隷による食物窃取行為は、奴隷主の与える配給食料に対する量的、質的不満の解消を動機とするものであった。しかしながらその動機の背後には、自己の奴隷状態・身分に対する深い内省と過酷な日々の労働体験とを通じて獲得していった確固たる認識が存在したのである。その認識とは、自分たち黒人は奴隷化されたその瞬間より、白人自由社会の道德律の適用を一切受けない存在であるということ、また、奴隷による労働成果は労働する者、すなわち奴隷の権利である、という彼らなりの労働倫理であった。従って、奴隷による窃取は奴隷の一時的な生理的・感情的表出をその表面的現象としながらも、本質的には奴隷が自ら置かれた奴隷身分に対して下したすぐれて論理的な帰結行為であったと言えよう。

Ⅳ 食物窃取の歴史的意味

（i）連帯意識の形成

前章の考察でわれわれは、食物窃取行為に隠された奴隷たちの意識として、彼ら独自の道德律、労働倫理が認められた点を明らかにした。そこで次に、こうした道德・倫理観に基づいて正当化された食物窃取が奴隷制下で抑圧的生活を余儀なくされていた奴隷たちに一体いかなる影響を及ぼしたのか、この点を彼らの意識、行動両側面に注目し、考察することにする。

周知のように、アンティ・ベラム南部奴隷制社会においては奴隷間の結婚はいかなる法的地位も与えられてはいなかった。従って、法的規範の下では奴隷家族の存在は認められていなかったのである。合法的婚姻の否定は、「子供は母親の身分に従うものとするという規則とともに、奴隷の子 (the offspring of slaves) は父親が奴隷であろうと自由人であろうと、合法的な父親を持たない」ことを意味した⁽¹⁾。しかし、現実には奴隷制下に奴隷の夫婦、家族は存在した

のである。それは言うなれば、「法的構造の二元性」(duality of the legal structure)によるものであった⁽²⁾。つまり、南部奴隷州は奴隷の法的行動規範及び規範の違反に対する処罰の定義をかなり広範囲にわたって事実上奴隷主たちに委譲していたのである。ここに奴隷間の結婚状態は、ひとえに奴隷主の性格や利害に依存することとなり、奴隷家族の不安定性、とりわけ家族崩壊の脅威という問題が避け難いものとなったのである。しかし、70年代奴隷制史研究の諸成果が示すように、奴隷たちは家族を離散、崩壊へと導く諸々の外的圧力に抗して自らの家族的紐帯を維持し、人間的主体性の再生を可能ならしめるような安定した家族の構築に全力を傾注したのであった⁽³⁾。

奴隷が自律的社会的な生活空間の創出や人間的主体性の確立に向けて努力していく過程において、彼らが毎日取る食事の果たした役割は大きかった。奴隷コミュニティ(slave community)において奴隷家族が果たした中心的役割を積極的に評価したジョン・ボウルズ(John B. Boles)も指摘しているように、奴隷家族にとって「全員が炉床を囲んで分かち合う一家の食事は、自分たちの力ではどうにもならない諸々の理由の故に互いに希薄な関係になっている者たちをしっかりと繋ぎ留める」のに大いに役立ったのであった⁽⁴⁾。こうした家族の中であって、特に既婚男性奴隷は、自ら働いた労働に対する正当な報酬として奴隷主に衣食住の提供を求めると同時に、家族構成員に対する食物供給者として重要な役割を担っていた。質、量の点で不十分な常食を補うために盗品食料を家族構成員に分け与える行為は父親としてのいわば役割分担的行為であった。そして、不安定な家庭生活において遂行されるこうした父親の行為は家族的紐帯の強化につながった。夫が家族の食物を供給することで、妻の夫に対する愛情は増し、子供たちも家族になくてはならない存在として父親に対する信頼感を一層高めていったからである⁽⁵⁾。

勿論、父親ばかりでなく、時には家族構成員が協力して盗みを働くこともあった。ミルトン・クラークは奴隷監督を出し抜き、盗んできた子豚を機転を働かせて隠した時の様子を次のように語っている。

「殺した豚を小屋の中に入れ、お湯をぐらぐら煮立たせていたところ、彼女はペリシテ人〔ペリシテ〕がやってくるよと息子に警告されました。彼女は機転をきかし、この咄嗟の緊急事態に実にうまく対処しました。直ちにその豚は沸騰している釜の湯の中に投げ込まれ、その上に戸板がかぶせられ、彼女の娘がそこに座らされ、厚いキルトで彼女の体をくるんだので、奴隷監督は小さなクララがひどい風邪をひいたために蒸し風呂に入っているのだと思い込みました。娘の方も自分の役を見事に演じ、ひどくうめき苦しんでみせたのでした。母親が娘をキルトでくるむのに忙しく立ち振る舞っていたので、監督はそちらの方に気を取られ、豚の剛毛を発見することなく行ってしまいました。⁽⁶⁾」

このように、食物窃取行為は脆弱な家族構成員間の集団的心性を徐々に高めてゆき、強い血縁的結合意識を確立する上で重要な役割を果たしたのであった。

ところで、食物窃取行為は家族という枠を超え、奴隷居住区（slave quarters）全体に対しても大きな影響を与えたのであった。窃取行為は奴隷個人による場合のほか、同一居住区に住む複数の奴隷が共謀して行なうことも決して珍しくなかった⁽⁷⁾。例えば、当時「豚どろぼう」（hogstealing）は鶏どろぼうと並ぶ代表的窃取の一つとみなされていたが、これには「力と技をうまく組み合わせて行なうこと」が必要とされ、成功するには手際の良さと敏捷性が求められた⁽⁸⁾。そのため、奴隷間の相互協力体制が非常に重要なものと考えられた。特に獲物に「悲鳴をあげさせないようにして」絞殺し、素早く解体する技術を持っている者は奴隷仲間から信頼と尊敬を獲得し、またそれが故に実践においては自分の持てる技術を披露し、仲間たちの期待に応えようとしたのであった⁽⁹⁾。

それだけに、獲得した獲物は奴隷たちにとっては食料的価値以上の意味を有していた。彼らはよく窃取食物をプランテーション近隣の森林地帯や小溪谷に運び、居住区の仲間と秘密裏の祝宴を催したり、また獲得した食料を居住区に持ち帰り、仲間たちと秘かに飲み食い語り合い、楽しい一時を過ごしたりした。

ある奴隷の言によれば、盗んできた豚肉で行なう「バーベキューほど楽しいものはない」のであった⁽¹⁰⁾。それは夜中の秘密裏の^{ブレア・ミーティング}祈禱集会同様、奴隷たちが相互に友情や信頼関係を確認し合い、連帯意識を高めてゆく機会となったのである。フィリップ・シュウォルツ (Philip J. Schwarz) は、奴隷による窃取行為と大規模な反乱、暴動との因果関係を究明した論文において、豚どろぼうに言及し、次の点を鋭く指摘している。すなわち、少数の奴隷たちにとって、それは生存あるいは常食の改善という点で意味あることであったが、「他の大勢の奴隷たちにとって、それは祝宴を共にする機会を提供するものであった。そしてこのような祝宴は、連帯意識 (fellowship) を保持してゆく手段として、その機能を果たしたのであった。⁽¹¹⁾」このように食物窃取は、奴隷居住区内においては食料的価値のみならず、奴隷たちの精神的結束、連帯意識の強化という「社会的価値」 (social value) をも獲得したのであった⁽¹²⁾。

更にこの問題に関して検討を加えるならば、奴隷による食物窃取は、家族や同一プランテーション奴隷という枠を超え、近隣プランテーション奴隷との連帯意識の形成にも貢献したのであった。これは、言うなれば、奴隷コミュニティとしての連帯意識の形成として位置付けられるものである⁽¹³⁾。奴隷主による不当な鞭打ちや他の奴隷主への売却などに対して奴隷が恐怖を抱き、プランテーション近くの森林地帯や沼沢地に一時的に逃亡するような例が現実にししばしば生じたことは周知の事実であるが、この種の逃亡行為においては、奴隷は携帯食料が欠乏してくると、近隣プランテーションの食料貯蔵庫に盗みに入ったり、当該プランテーション奴隷たちより食物を提供してもらおうというケースが一般的であった⁽¹⁴⁾。しかもこの提供食物自体、奴隷主からの盗品である場合が実に多かった。ジョージア州のピアス・コウディという名の元奴隷は、この種の逃亡奴隷について次のように述懐している。彼らは「食物が不足してくると、皆が寝静まった夜中、[奴隷] 居住区に忍び入り、そこにいる同じ奴隷仲間のだれかに食べ物を取って来てくれるようせがむのでした。そして、それらを手に入れると、彼らは再び去って行くのでした。⁽¹⁵⁾」また、サウス・カロライナ州で奴隷制を体験したメアリ・スミスは、白人に逮捕されるまでの

5ヶ月間森の中で穴居生活をしていたジャック・ギストという奴隷について次のような興味深い証言を行なっている。「真夜中になると、ジャックが仲間たちに会いにやって来るのです。そこで、彼らは彼に食べ物を与えるのです。彼ら〔白人たち〕が彼を捕えた時、彼は豚1頭、ガチョウ1羽、鶏数羽、それに胴肉2枚〔食肉用の家畜の頭と四肢を切断したもの〕を持っていました。⁽¹⁶⁾」その他、少し事情を異にするが、食料に比較的恵まれている奴隷が近くに住む飢えた奴隷たちに窃取食物を与えた例や、近隣プランテーションから食物を盗んでも、「隷従下にある者たち〔奴隷たち〕からはしばしば黙認されていた」逃亡奴隷やマルーンの数々の実例が見出されるのである⁽¹⁷⁾。これらはいずれも、奴隷によるプランテーション周辺部への短期的逃亡が他のプランテーション奴隷との接触を可能にし、しかも逃亡奴隷に対する食物窃取という積極的支援行為、或いは逃亡奴隷自身による食物窃取行為に対するプランテーション奴隷たちの黙認という間接的協力的態度を媒介として、奴隷間の連帯意識を複数のプランテーション奴隷居住区にまで浸透せしめたことを例証するものである。このように、食物窃取は、奴隷家族の血縁的結合意識を高めたばかりでなく、奴隷居住区の、更には近隣奴隷居住区相互の、すなわち奴隷コミュニティ全体としての精神的結束及び連帯意識の強化に貢献したのであった。

(ii) 人間的主体性の再生へ向けて——可能性と限界

以上の考察は、一見、奴隷コミュニティ及び奴隷文化の自律性とその役割を評価、強調する立場から描かれてきた奴隷世界像の提示を可能にするように思われる。例えば、聞き書きを全面的に駆使し、奴隷たちが居住した世界を析出したエスコットは、「奴隷主と奴隷は異なる世界に住んでいた」とし、奴隷制下では両者の肉体的接近性が単に相互の心的分離意識を高めただけであったことを強調すると共に、従来、労働職種の差異から徐々に醸成されていったと考えられてきた奴隷間の階級意識も、実は彼ら黒人奴隷たちの集団的帰属意識、同胞意識に圧倒されてしまい、結局奴隷たちの間には「発達した階級制度なるものはどこにも見られなかった」という見解を示している⁽¹⁸⁾。しかし、こうし

た捉え方は、奴隷主階級の影響力が奴隷制下の奴隷の意識や行動に殆ど達していなかったという解釈を可能にし、しかも奴隷による食物窃取行為を、彼らの意識の問題も含めて、反乱、暴動といった奴隷制に対する大胆な抵抗運動に直結する行為として軽々に位置付けてしまう危険性を孕んでいる。

一例を挙げよう。1800年、ヴァージニアのヘンリコ郡でガブリエルという名の奴隷がジュピター、ソロモンを始めとする奴隷たちと大規模な反乱を企てた。だが、実はこの3名の主犯格奴隷は、いずれもその前年、1799年にある豚どろぼう事件に関与し、中でもガブリエルは白人関係者1人に肉体的危害を加えたのであった。シュウォルツは、この1799年の事件と1800年のいわゆる「ガブリエルの反乱」(Gabriel's Insurrection)との関連性を追求し、このような反乱者は「時間をかけて成長してゆく」ものであると主張し、「1799年の犯罪者たちは1800年の反乱者たちになりつつあった」とみている。このことは彼が、1799年の時点でこれら3名の奴隷は意識的に「奴隷支配制度」(the system of slave control)に挑戦したと捉えていることを意味する⁽¹⁹⁾。確かにこの3名の奴隷に関しては、比較的早い段階から奴隷支配に対して抵抗意識を内面化させていたように思われる。しかし、シュウォルツは、こうした反乱奴隷の意識構造を他の一般奴隷たちにも当てはめ、彼らが自分たちの力、コミュニティの強力な力を様々な手段で行使することによって、積極的に「白人奴隷主たちの〔支配力の〕限界を試し」たのであった、とするのである⁽²⁰⁾。これは、全ての奴隷がかなり明確な意識の下に積極的に奴隷制に対して抵抗したと解することができよう。しかしながら、皮肉にもシュウォルツ自身考察の中で明らかにしているように、奴隷を取り巻く諸々の環境条件がその奴隷の行動を大きく方向付け、奴隷がきちんと管理、統制されている地域では、奴隷制への抵抗は「公然たる反抗形態よりもむしろ、秘密裏の手段に訴えて反抗する傾向」にあったのである⁽²¹⁾。

この点は重要である。既に第2章で考察したように、19世紀アンティ・ベラム南部奴隷制の特徴は、緊張を孕んだ主人＝奴隷関係から生み出された温情主義を中核とする社会制度的側面にあった。18世紀から19世紀への世紀転換期を

経て、奴隷制の性格は徐々にこのように変容してゆき、全ての奴隷は程度の差こそあれ、このような主人＝奴隷関係の中に入り込んでいったのである。奴隷コミュニティの堅固さ、団結力を強調し、奴隷文化の自律性を過大評価するあまり、あたかも奴隷世界が周囲の影響を殆ど受けずに「ユートピア的奴隷コミュニティ」(the utopian slave community)とでも言い得るような一種自己完結的閉鎖社会を形成していたかのように把握するのは誤りであろう⁽²²⁾。結局、南部奴隷制は主人と奴隷の相互作用の結果なのである。この意味で、カール・デグラー (Carl N. Degler) の奴隷家族の形成に関する見解は実に正鵠を射ている。彼は比較史的観点から、「新世界におけるあらゆる奴隷制社会の中で合衆国の場合のみ、奴隷たちが自らを再生産し」、家族形成が可能となったと主張する⁽²³⁾。そしてその奴隷家族は、彼によれば、単に奴隷たちだけの力でつくり出されたものではなかったのである。

南部奴隷制下における奴隷の食物窃取を考える場合、この家族の持つ意味が極めて重要になってくる。奴隷は、食物に対する生理的要求の意識の根底に、奴隷労働、奴隷制社会に対する様々な矛盾を内面化し、「自己の権利」を取り返そうと試みた。しかし、その食物窃取という行為は、主人との「重苦しい」温情主義的関係を維持しながら、且つ不安定な奴隷家族の現実を視野に収めつつ実行せざるを得ない性質のものであった。本格的な家族形成の道が唯一開かれていた南部奴隷制下で奴隷たちがいかに家族を死守しようとしたかはここで改めて論じるまでもない。あらゆる奴隷にとって、売却され、家族と離別することは死同様の恐怖以外の何物でもなかったのである。

奴隷売却による奴隷家族の崩壊率については研究者間でもかなりの差異が見られるが、例えばクロフォード (Stephen C. Crawford) は、元奴隷に対して行なわれたインタビュー記録 (ex-slave interviews) のサンプルを使い、13才以下の742人の奴隷が育てられた世帯の分布状況を再現することに成功し、「66パーセントは両親のいる家庭に暮らし」ていたが、「24パーセントは片親しかいない家庭（この殆どが母親を長とする家庭であった）に」生活し、残りの10パーセントは奴隷主の屋敷か奴隷居住区で一人暮らしをしていたことを発見した

(24)。この数値から、13才以下の奴隷の3分の1は、片親ないし両親が欠落している家庭で暮らしていたことがわかる。そして彼は、この3分の1の奴隷たちの内、約60パーセントの者が主として国内奴隷貿易により、親を失ったと分析しているのである。

売却行為が奴隷の意識や精神に与えた影響を考慮に入れば、この割合はかなり高かったと判断して差し支えないであろう。奴隷売却が奴隷に与えた影響を分析する場合、注意しなければならない点は、現実には奴隷が売却された割合は言うまでもなく、残虐、非人道的なそうした行為が奴隷家族に及ぼした心理的、精神的圧力の程度である。家族から引き裂かれるような事態がいつ自分の身に振りかかってこないとも限らない、そうした自己の境遇に対して抱く不安、恐怖は奴隷たちの内面にかなりのインパクトを与えたのであった。とりわけ奴隷制という機構が生み出した「競売台」(the auction block)は、鞭同様、奴隷に対して恐怖の象徴として作用したのであった。1848年生まれのスウス・カロライナの奴隷ピーター・クリフトンは大プランテーションで奴隷として過ごし、結局主人が1名の奴隷しか売らなかったにもかかわらず、その奴隷は「売却されて自分の妻や子供たちから引き裂かれるのを絶えず恐れていた」と語っている(25)。また、「地下鉄道」組織の女傑ハリエット・タブマンは隷従下に置かれていた時のことを想起し、「白人の男を見るたびに、連れて行かれるのではないかと恐怖を感じました」と率直に告白している(26)。

勿論、食物窃取行為は新世界の奴隷制社会に広く見られた現象であった。しかし、合衆国南部では、スウス・カロライナは例外として、他地域の奴隷制社会と比較すると、窃取行為はかなり小規模な程度にとどまっていた(27)。その主たる原因は、温情主義下に形成されていった奴隷家族にあった。奴隷たちは、自らの人間的主体性の完全なる再生を反乱、暴動といった激的な手段によって実現するには、あまりにその代償が大きすぎたのである。奴隷主や奴隷制に対して抵抗意識を内面化しながらも、反乱、暴動に代表される積極的、直接的な抵抗行為に加わらず、食物窃取という消極的、間接的な抵抗行為の方向に向かっていった理由はここにある。このことは、翻って見るに、合衆国アンティ

・ベラム南部においては、奴隷主階級が奴隷支配・統制の手段として生み出した温情主義を武器とした奴隷制は、巧みに奴隷たちに家族的生活空間を与えることによって彼らの意識を奴隷制内部に向かわしめ、自立的人間性を確立しようとする闘争心、抵抗意識を弱め、彼らを消極的抵抗行為である食物窃取へと導いたのであった⁽²⁸⁾。それ故食物窃取は、奴隷家族や奴隷居住区、また奴隷コミュニティ全体の結束性、連帯意識を強化し、奴隷の人間的主体性を確立してゆく可能性を示す行為ではあったが、同時にそれは、彼らの心的強靱さの源泉とも言うべき家族を奴隷主により奴隷支配の重要な武器として位置付けられてしまったことで、結局、積極的、直接的な抵抗意識へとは展開し得ず、消極的な抵抗意識・行為のレベルに終始したのであった。この意味において、食物窃取を権力のパラメーターを決定する主人＝奴隷間の闘争の一部としては理解し難いのである。

V 結びにかえて

再び「はじめに」で投げかけた問について概説してみよう。アンティ・ベラム南部奴隷制下で常習的に生起していた奴隷による食物窃取行為は、奴隷主が定期的に与える配給食料に対する量的、質的不満を動機とするものであった。しかしこの動機の背後には、奴隷たちが抑圧体制下で日々の過酷な労働を通して内面化していった彼らなりの明確な論理が認められた。それは端的に言うならば、白人社会の一切の道德律を拒絶し且つ労働の成果は労働する者の当然の権利であるとする認識であった。この点から、食物窃取行為は直接的、表面的には空腹感を満たす、また質的により豊かな食事を求める一種生理的現象としながらも、本質的には奴隷が自己の身分に対して下したすぐれて論理的な帰結行為であったと解されるのである。

奴隷たちはこのような意識を内に秘めながら家族や同一居住区構成員間相互の協力体制の下に食物窃取に及んだのであるが、加えて近隣プランテーション

奴隷に対する盗品食物の提供という形をもとることにより、結局、食物窃取行為は、家族や同一居住区構成員間の集団的結束はもとより、複数の奴隷居住区を包摂する奴隷コミュニティ全体の連帯意識を形成していったのであった。

だがこの連帯意識は、奴隷たちを奴隷制に対して積極的、直接的抵抗行為へと向かわしむるまでには至らなかった。その主たる原因は、南部奴隷制の歴史的な性格変容に求められるのである。つまり、アンティ・ベラム期の奴隷制は、それ以前の経済的搾取を第1目的とした労働奴隷制としての傾向を弱め、温情主義を支配統制手段として行使した奴隷主の下に一種の社会制度としての性格を強めていった。奴隷たちは他の新大陸奴隷制には決してそのアナログを見出し得ないような本格的な家族を構築したのであったが、それはもとより強大な支配力を有する奴隷主の意思の許容範囲内のことに過ぎなかった。それ故、奴隷家族の構成員は誰でも強制的に引き裂かれる潜在性より生じた苦渋にみちた不安感、恐怖感から免れることはできなかったのである。このことは、温情主義という奴隷支配装置がかなり発達した奴隷家族の創出を可能ならしめ、奴隷たちの意識を奴隷制内部に向け、結果として奴隷たちの抵抗意識を弱めたと見ることができるのである。食物窃取行為に走った平均的奴隷の抵抗意識とはこのようなものであった。

最後に今後の研究課題として現在思い当たる範囲で問題点を幾つか指摘しておきたい。すなわち、食物に限らず奴隷によるあらゆる窃取行為は主に奴隷主に対して向けられたのであったが、実はそれは奴隷コミュニティ内部においても見られたのであった。その頻度は定かではないが、こうした行為は明らかに奴隷間の結束性、連帯意識を弱め、場合によっては奴隷間に内部分裂、不和を生起せしめる危険性を孕んでいた。同胞奴隷同士の窃取行為を奴隷がいかに受け止めていたか、また奴隷主はこうした事態をどのように処理していたか、更にはこうした行為が奴隷コミュニティや奴隷制の組織にいかなる影響を及ぼしたか等、解明すべき点が具体的に考えられるのである。

注 I はじめに

- (1) Eugene D. Genovese, *Roll, Jordan, Roll: The World the Slaves Made* (New York: Pantheon Books, 1974), p. 599.
- (2) 例えば、Gerald W. Mullin, *Flight and Rebellion: Slave Resistance in Eighteenth-Century Virginia* (New York: Oxford University Press, 1972), pp. 60–62; Paul D. Escott, *Slavery Remembered: A Record of Twentieth Century Slave Narratives* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1979), pp. 76–77 における彼らの指摘を見よ。また、他人の所有物を常習的に盗み取った事実は、奴隷側の史料によって簡単に知ることができる。例えば、George P. Rawick, ed., *The American Slave: A Composite Autobiography* (41 vols.; Westport, Greenwood Press, 1972–79), *South Carolina Narratives.*, Vol. 2., Part 1., p. 2. (以下、本史料からの引用は、Rawick, ed., *South Carolina Narr.*, 2(1), p. 2. のように略記する。); Fisk University, *The Unwritten History of Slavery: Autobiographical Accounts of Negro Ex slaves* (Nashville: Social Science Institute, 1945), p. 9; Genovese, *op. cit.*, p. 607. より詳しくは第3章注(3)を参照されたい。
- (3) 例えば、Kenneth M. Stampp, *The Peculiar Institution: Slavery in the Ante Bellum South* (New York: Random House, 1956), pp. 86–140. 邦訳、足田三良訳 小山起功解説『アメリカ南部の奴隷制』(彩流社, 1988), 87～136頁; Thomas L. Webber, *Deep Like the Rivers: Education in the Slave Quarter Community, 1831–1865* (New York: W. W. Norton & Company 1978), p. 109. 邦訳、西川進監訳 竹中興慈訳『奴隷文化の誕生 [もうひとつのアメリカ社会史]』(新評論, 1988年), 188～189頁; Escott, *op. cit.*, pp. 71–94.

勿論、ケネス・スタンプによる研究以前にも奴隷の個人的・集団的抵抗行為を扱った大きな研究は存在した。しかし、それらの研究において問題とされた抵抗行為は過激な直接的行為に限られていた。例えば、カーター・ウッドソン (Carter G. Woodson) やハーバート・アプテカー (Herbert A. Aptheker) は、奴隷制に対して奴隷が激しく抵抗運動を繰り返した点に注目し、それを強調した。特にアプテカーは、植民地時代から南北戦争終結に至るまでの間に10人以上の奴隷が関与していた反乱陰謀の数は夥しく、また現実に生起した反乱もかなりあったことを例証し、それまでフィリップス (Ulrich B. Phillips) 及びフィリップス学派によって打ち立てられていた支配的見解、すなわち奴隷主への奴隷の「服従的」、「従順的」、「献身的」態度は生来の黒人の性向からくるものであったとする見解を退けたばかりでなく、奴隷による抵抗を「革命的襲撃」(revolutionary

assaults) のイメージで捉えたのであった。Carter G. Woodson, *The Negro in Our History* (Washington, D.C.: Associated Publishers, 1927), p. 177; Herbert Aptheker, *American Negro Slave Revolts*, (New York: Columbia University Press, 1943), pp. 24ff, 162–208, 264–266, 268–272, 325–358; Ulrich Bonnell Phillips, *American Negro Slavery: A Survey of the Supply, Employment and Control of Negro Labor as Determined by the Plantation Regime* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1969, c1918), pp. 291, 328, 342; Phillips, *Life and Labor in the Old South* (Boston: Little, Brown & Co., 1963), p. 194.

しかしながら、この革命的襲撃形態としての奴隷の抵抗イメージは、メルヴィル・ハースコヴィッツ (Melville J. Herskovits) と彼の弟子レイモンド・バウアー、アリス・バウアー (Raymond A. Bauer & Alice H. Bauer) らによって大幅に塗り替えられることとなった。ハースコヴィッツは、奴隷たちは「公然たる反乱によらない他の様々な方法によって奴隷制に抗議」したのであったとし、怠業や意図的な農作業道具の誤用を始めとする奴隷による間接的抗議を唱えた。この立場はR・バウアー、A・バウアーらによって受け継がれ、この種の奴隷の抵抗は「日々の抵抗」ないしは「間接的報復」なる表現を与えられた。結局、ハースコヴィッツと彼の弟子によって明らかにされた点は、奴隷は何も反乱、暴動、恒久的自由獲得のための生命を賭けた逃亡など非日常的且つ過激な手段によってのみ自己の奴隷状態や奴隷制に抵抗したのではなく、怠業や道具の誤用、また近隣沼沢地への一時的逃亡や、放火、仮病、自己不具化、自殺、乳児殺しといった間接的ないしは日常的な手段によって絶えず抵抗を試みていたという点であった。だが、窃取行為が奴隷制に対する奴隷の重要な抵抗手段の一つとして正しく位置付けられるようになるにはスタンプの画期的労作まで待たなければならないのであった。Melville J. Herskovits, *The Myth of the Negro Past* (Boston: Beacon Press, 1958, c1941), pp. 99ff; Raymond A. Bauer and Alice H. Bauer, "Day to Day Resistance to Slavery," *Journal of Negro History*, 27 (October, 1942), pp. 388–419.

- (4) 奴隷主階級が奴隷の窃取行為を概して冷静に受け止めていたことは周知の事実である。「奴隷による盗み行為は至る所に見受けられ、しかもそれを阻止することは困難である」といった奴隷主の言葉は別段珍しくなかった。更に、19世紀に入ると、「奴隷主たちは——奴隷による盗みをますます当然のことと受け止めるようになっていった」等の指摘も研究者によってなされている。Escott, *op. cit.*, p. 77; Genovese, *op. cit.*, p. 600. しかしながら、このことは、彼らが窃取行為に

対して直接的脅威はそれほど感じてはいなかったということの意味するものであり、必ずしも奴隷主階級がこの問題を放置していたということではない。この点に関しての奴隷主の態度、具体的方策については、Alex Lichtenstein, “‘That Disposition to Theft, with which They Have Been Branded’: Moral Economy, Slave Management, and the Law,” *Journal of Social History*, 22 (Spring, 1988), pp. 420–424 が差し当たり参考になろう。

- (5) 例えばエスコットは、大部分の奴隷たちが「実現性のない行動はきっぱりと拒絶する分別ある態度を示した」とし、平均的奴隷が逃亡、反乱、暴動といった過激な行為に走らなかった点を指摘している。Escott, *op. cit.*, p. 71.

注 II 奴隷制の歴史的 성격——その変容について

- (1) この点について異論はないと思うが、一例を挙げると、奴隷の生活状態、奴隷に対する懲罰、法的規制等は奴隷制の存続した全期間中、あたかも変わりがなかったかのように叙述されているのである。Ulrich B. Phillips, *American Negro Slavery*, pp. 228–343, 454–514.
- (2) Willie Lee Rose, *Slavery and Freedom* ed. William W. Freehling (New York: Oxford University Press, 1982), p. 20. ローズ同様の指摘は、他の奴隷制研究者の言の中にも見出される。例えばカール・デグラー (Carl N. Degler) は、ネイスン・ハギンズ(Nathan Irvin Huggins) 著 *Black Odyssey: The Afro-American Ordeal in Slavery* (New York: Pantheon Books, 1977) に対する書評論文の中で、最近の殆どすべての研究は時を貫いた奴隷制の発展の描写を全く欠いていると指摘し、ジェノヴィーズの『ロール・ジョーダン・ロール』(*Roll, Jordan, Roll*, 1974) やそれ以前に出版されたスタンプの『奇妙な制度』(*The Peculiar Institution*, 1956) を例に引き、それらが「変化しない奴隷制のスナップショットのようなもの」であると述べている。Carl N. Degler, “Experiencing Slavery,” *Reviews in American History* 6 (September, 1978), p. 279. また、奴隷自身の残した史料を大々的に駆使し、奴隷コミュニティの実態や奴隷心理の分析など、奴隷制を「内側から」解明しようとした最初の包括的研究として評価されてきたジョン・ブラッシングゲーム (John W. Blassingame) の *The Slave Community: Plantation Life in the Antebellum South* (New York: Oxford University Press, 1972) など奴隷制の歴史を通時的に捉えてはいない。
- (3) 以上の諸説を知るには次の文献が参考になる。Frank Tannenbaum, *Slave and Citizen: The Negro in the Americas*, Vintage Books (New York: Random

House, 1947) 邦訳、小山起功訳『比較文化史的試み——アメリカ圏の黒人奴隷』(彩光社, 1980年); Stanley M. Elkins, *Slavery: A Problem in American Institutional and Intellectual Life* (Chicago: The University of Chicago Press, 1976); Sidney W. Mintz, "Labor and Sugar in Puerto Rico and in Jamaica, 1800–1850," *Comparative Studies in Society and History*, 1 (March, 1959), pp. 273–280; Arnold A. Sio, "Interpretations of Slavery: The Slave Status in the Americas," *Comparative Studies in Society and History*, 7 (1965) pp. 289–308; Winthrop D. Jordan, "American Chiaroscuro: The Status and Definition of Mulattoes in the British Colonies," *William and Mary Quarterly*, 19 (April, 1962), pp. 183–200; Herbert S. Klein, *African Slavery in Latin America and the Caribbean* (New York: Oxford University Press, 1986); S・エルキンズ他, 山本新也編訳『アメリカ大陸の奴隷制——南北アメリカの比較論争——』神奈川叢書4 (創文社, 1978年)

- (4) 南部各奴隷州に存在した奴隷の身分や言動に関する諸規定、特に奴隷法が南部支配者階級であった奴隷所有者たちの手によりつくられ、彼らの利益を反映するものであったとの見解は、例えばジェノヴィーズの研究によって示されている。Genovese, *Roll, Jordan, Roll*. pp. 26–27, 41, 47–48.
- (5) 南部奴隷法と奴隷主との関係についてアーノルド・A・シオは、「南部の奴隷法は政策と規律の問題に関しては主人の完全なる支配権を保証していた。奴隷の主人との関係は完全な従属関係に当然あるものとされていた」と述べている。Arnold Sio, *op. cit.*, p. 295.
- (6) 一般に奴隷法の整備及びその適用に関しては、厳しい時期と緩やかな時期が交互に現われたことが確認されている。奴隷制に対する「外部からの攻撃ないしは内部からの反乱の危険性が極度に達していると思われる時期」には、奴隷主階級は積極的に州政府に働きかけ、法改正またはより厳格な条項の追加を迫った。しかしこの種の危険性も収束し、一端平穏な状態に戻ると、その後は現行法でさえも一部は何十年間も適用されないという状況が生起したのであった。Stampp, *op. cit.*, p. 207 参照。しかしここでは、このような比較的短期的な奴隷法の部分的改正、変化は問題にしない。より長期的な視野から奴隷法の法体系としての変化を問題とする。
- (7) *Ibid.*, p. 218. 奴隷が係わった裁判の判決例の中には、18世紀においては奴隷を動産 (personal property) や不動産 (real estate) とみなしている例が実に多い。以下はその一部である。Helen Tunnicliff Catterall, ed., *Judicial Cases Concerning American Slavery and the Negro* (5vols.; Washington, D. C.:

Carnegie Institution, 1926—1937), Vol. 1, pp. 82, 83—84, 86—87, 88—89, 92—93, 98—99, 103, 269; Vol. 4, p. 51. 以上が奴隷を動産とみなしている判例である。また奴隷を不動産とみなしている判例としては、*Ibid.*, Vol. 1, pp. 86, 88, 89, 93, 95, 97, 100, 103, 104.

- (8) 「1705年のヴァージニア奉公人・奴隷法」第49章34条 池本幸三『近代奴隷制社会の史的展開—チェサピーク湾ヴァージニア植民地を中心として—』（ミネルヴァ書房，1987年），428頁。
- (9) 奴隷法中のこの種の規定に関しては、例えば、Stampp, *op. cit.*, p. 225; 池本幸三，前掲書，431頁を参照されたい。
- (10) Rose, *op. cit.*, p. 23.
- (11) Stampp, *op. cit.*, p. 210.
- (12) *Ibid.*, p. 225.
- (13) *Ibid.*, p. 192.
- (14) Catterall, ed., *op. cit.*, Vol. 3, p. 674.
- (15) *Ibid.*, Vol. 2, p. 530. その他、判例の中には奴隷を指して ‘a reasonable creature in being’ 或いは ‘rational human beings’ と表現し、奴隷が埋性的存在であることを明確に表現している例や、また単なる動産ではない証拠として、奴隷は「犯罪を犯し得る人間」であり、当然その結果として「刑事被告人たり得る」ものである、といった見解も見出される。*Ibid.*, Vol. 1, pp. 122, 149; Vol. 2, pp. 198, 241, 277, 356, 384, 494, 530; Vol. 3, pp. 35, 168, 233, 247, 482, 534, 597, 674, 676; Vol. 4, p. 139; Vol. 5, pp. 165, 230.
- (16) Stampp, *op. cit.*, p. 192.
- (17) Genovese, *op. cit.*, p. 47.
- (18) Rose, *op. cit.*, p. 25; Stanley Elkins, “How to Understand Slavery,” *New York Review of Books*, April 29, 1982, p. 21.
- (19) 17、18世紀の南部奴隷制が19世紀の奴隷制に比べて組織的に奴隷を酷使用する制度であったとする見方については、例えば、Stampp, *op. cit.*, p. 81; George P. Rawick, *The American Slave: A Composite Autobiography*, Vol. 1: *From Sundown to Sunup: The Making of the Black Community* (Westport: Greenwood Publishing Co., 1972), p. 138. 邦訳、西川進訳『日没から夜明けまで——アメリカ黒人奴隷制の社会史』（刀水書房，1986年），199頁。
- (20) Rose, *op. cit.*, p. 25.
- (21) *Ibid.*, p. 23.
- (22) Mullin, *op. cit.*, pp. 19—33.

- (23) Winthrop D. Jordan and Sheila L. Skemp, eds., *Race and Family in the Colonial South* (Jackson: University Press of Mississippi, 1987), p. 40.
- (24) アンティ・ベラム南部の典型的な白人プランター家族は、従来考えられてきたような核家族ではなく、血縁や婚姻により結び付けられた者たちを含む一種の大家族であったことが極最近の研究により明らかになっている。キャッシュン (Joan E. Cashin) によれば、プランター家族の場合、親戚相互の交流が活発に行われ、比較的近くに居住するおじ、おば、姪、甥、いとこ等が頻繁に訪れ、短期、長期の滞在をし、その間家成員として十分みなし得る仕事、活動を行ったのであった。従って、プランターの家族構造は弾力的であったとする。またクリントン (Catherine Clinton) は、南部プランターたちの間に見られたいとこ同士の結婚率を12パーセントと分析している。Joan E. Cashin, "The Structure of Antebellum Planter Families: 'The Ties That Bound us Was Strong,'" *Journal of Southern History*, 56 (February, 1990), pp. 55-70; Catherine Clinton, *The Plantation Mistress: Woman's World in the Old South* (New York: Pantheon Books, 1982), pp. 57-58, 233.
- (25) Rose, *op. cit.*, p. 24; Genovese, *op. cit.*, pp. 40-42.
- (26) 奴隷制の温情主義的性格への移行は、思想的、経済的、人口動態的観点からも分析が試みられている。Rose, *op. cit.*, pp. 25-27.
- (27) *Ibid.*, p. 24.
- (28) *Ibid.*, p. 20. ジェノヴィーズは、17、18世紀の大半の期間、白人たちが奴隷の宗教信仰に対して注意を払わなかった点、また、彼らを「キリスト教に改宗させようと殆どしなかった」点を指摘している。Genovese, *Roll, Jordan, Roll*, p. 185. また、John B. Boles, ed., *Masters and Slaves in the House of the Lord: Race and Religion in the American South, 1740-1870* (Lexington: the University Press of Kentucky, 1988), p. 99; Rawick, *American Slave*, Vol. 1, pp. 32-33. 邦訳、52-53頁も参照。
- (29) Genovese, *op. cit.*, p. 190; Boles, ed., *op. cit.*, pp. 99-104.

注 Ⅲ 食物窃取の動機及びその背後の意識

- (1) Genovese, *Roll, Jordan, Roll*, p. 146. 拙論「南部奴隷制における主人＝奴隷関係——その解釈をめぐって——」『新潟短期大学社会科学論集』第20号 (1982年), 34-35頁も参照。
- (2) Jim Miller, "Battle Hymn for Blacks," *Newsweek*, January 18, 1982, p. 51.

- (3) Norman R. Yetman, ed., *Life Under the "Peculiar Institution": Selections from the Slave Narrative Collection* (New York: Robert E. Krieger Publishing Company, 1976), p. 224; John W. Blassingame, ed., *Slave Testimony: Two Centuries of Letters, Speeches, Interviews, and Autobiographies* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1977), p. 652; Benjamin A. Botkin, ed., *Lay My Burden Down: A Folk History of Slavery* (Chicago: University of Chicago Press, 1945), p. 46. そのほか、奴隷による同種の窃取証言に関しては、例えば、Rawick, ed., *Texas Narr.*, 4(1), p. 198; 4(2), p. 181; 5(4), p. 75; *Arkansas Narr.*, 8(2), pp. 258–259; 11(7), p. 174; *Georgia Narr.*, 12(1), pp. 301–302; *North Carolina Narr.*, 14(1), p. 60; 14(2), p. 424; Yetman, ed., *op. cit.*, pp. 49, 53, 71, 94, 112, 116, 178. また、「はじめに」の注(2)も参照。
- (4) Belinda Hurmence, ed., *Before Freedom: 48 Oral Histories of Former North and South Carolina Slaves* (New York: Penguin Books, 1990), p. 165.
- (5) Gilbert Osofsky, ed., *Puttin' on Ole Massa: The Slave Narratives of Henry Bibb, William Wells Brown, and Solomon Northup* (New York: Harper and Row, Publishers, 1969), pp. 24–25.
- (6) 盗品食料の品目に関しては、差し当たり注(3)の聞き書き資料^{ナラティヴ}の該当ページが参考になろう。
- (7) 例えば、Eugene D. Genovese, *The Political Economy of Slavery: Studies in the Economy and Society of the Slave South* (New York: Pantheon, 1965), pp. 44–46; Roll, Jordan, Roll, pp. 603–604, 638–639; Robert William Fogel and Stanley L. Engerman, *Time on the Cross: The Economics of American Negro Slavery* (2 vols.; Boston: Little, Brown and Company, 1974), Vol. I, pp. 109–115; Vol. II, pp. 90–99. 邦訳、田口芳弘・榊原胖夫・渋谷昭彦『苦難のときーアメリカ・ニグロ奴隷制の経済学』(創文社, 1981年), 84–89, 280–289頁; Paul A. David, Herbert G. Gutman, Richard Sutch, Peter Temin, Gavin Wright, *Reckoning with Slavery: A Critical Study in the Quantitative History of American Negro Slavery* (New York: Oxford University Press, 1976), pp. 231–301. ジェノヴィーズは、奴隷に与えられた食料が量的には何とか足りたとしながらも、それが栄養バランスの点で問題があったと主張する。彼によれば、奴隷は蛋白質、ビタミン、ミネラルなどの栄養素が特に不足しがちであったために、眼球乾燥症、脚気、壊血病等を時に引き起こしたり、また、コーンミール、脂身中心の豚肉、糖蜜などの澱粉質または高エネルギー質の常食のせいで、特殊な空腹状態や原因不明の栄養失調の状態に陥ったりしたのであった。これに対し、

フォーゲルとエンガーマンは、計量分析的手法により、奴隷の1日の食事の「平均エネルギー価」及び「栄養摂取内容」を分析し、奴隷の食事は質量共に十分であったと結論付ける。彼らは、1860当時の奴隷の食事の1日平均エネルギー価が1879年時の自由人のそれを10パーセント以上も上回っており、肉類も量的に不足してはいなかったとし、更に、1860年における奴隷の各種栄養素の1日平均摂取量を計算し、それらを1964年現在の1日必要所要量と比較した。その結果は、奴隷の各種栄養素の摂取量が1964年時の1日必要水準を蛋白質で112パーセント、カルシウムで20パーセント、鉄分で238パーセント、ビタミンCで152パーセント、ビタミンAの場合には奴隷がさつまいもを大量に消費していたこともあって必要水準をおよそ12倍も上回っていた、というものであった。フォーゲルとエンガーマンのこの見解に対する反論として、例えばサッチ (Richard Sutch) は、平均的奴隷は飢えてはいなかったが、食物の質、種類の点で不十分であったと結論付けている。尚、奴隷の常食を学説史的立場から簡単にではあるがまとめてあるものとして、次のものがある。Tyson Gibbs, Kathleen Gargill, Leslie Sue Lieberman, and Elizabeth Reitz, "Nutrition in a Slave Population: An Anthropological Examination," *Medical Anthropology*, 4 (Spring, 1980), pp. 175-262.

- (8) Escott, *op. cit.*, p. 38. 配給食料の量的不足を指摘している奴隷証言は、奴隷の伝記や聞き書き史料^{ナラティブ}の各所に見られる。次はそのごく一部の例である。Rawick, ed., *Texas Narr.*, 4(1), p. 35; *Indiana Narr.*, 6, p. 82; *Missouri Narr.*, 11, pp. 267, 323; Hurmence, ed., *op. cit.*, pp. 1, 28, 30, 34, 53-54, 65, 125; Yetman, ed., *op. cit.*, pp. 36, 53, 112, 116, 166, 178, 224, 297, 304, 316, 322, 327.
- (9) *Ibid.*, p. 116. 前注奴隷証言の中にも類例がかなり見出せる。
- (10) Rawick, ed., *Arkansas Narr.*, 8(2), p. 259; *Indiana Narr.*, 6, p. 82.
- (11) Rawick, ed., *Georgia Narr.*, 12(1), p. 199.
- (12) Rawick, ed., *Texas Narr.*, 5(3), p. 247; Yetman, ed., *op. cit.*, p. 304. 奴隷がいかに質的に豊かな食事を求めていたかは、例えばそれを獲得するために不本意ながらも奴隷主の身勝手な要求通りに振舞った奴隷たちの態度にも表れている。Rawick, ed., *Georgia Narr.*, 12(2), p. 330; Paul Escott, *Slavery Remembered*, pp. 21-22.
- (13) Rawick, ed., *Georgia Narr.*, 12(1), p. 302.
- (14) Blassingame, ed., *op. cit.*, p. 652. 「盗み」と「取ること」に対する奴隷たちの意識に論及しているものとして、Genovese, *op. cit.*, pp. 602-603; Webber, *Deep Like the Rivers*, pp. 88, 294. 邦訳、p. 156.

- (15) Gilbert Osofsky, ed., *op. cit.*, p. 166.
- (16) Frederick Douglass, *My Bondage and My Freedom* (New York: Arno Press, 1968, c1855), pp. 188–189, 191.
- (17) ダグラスのように食物窃取を主人の財産の単なる移動の問題として捉えていた奴隷の例としては、Austin Steward, *Twenty Two Years a Slave, and Forty Years a Freeman; Embracing a Correspondence of Several Years, While President of Wilberforce Colony* (Rochester, New York: William Alling, 1857), p. 29.
- (18) Rawick, ed., *Texas Narr.*, 4(2), p.163; *Georgia Narr.*, 12(2), p. 119; Hurmence, ed., *op. cit.*, pp. 1, 15. 奴隷主による道徳的偽善の事例としてよく奴隷たちが語っているのは、奴隷主が奴隷たちに「汝、主人の物を盗むなかれ」と執拗に言い聞かせた半面、近隣プランターの財産に関しては積極的に盗んでくるようそそのかしたという点である。具体的な例については、差し当たり次のものを参照にされたい。Yetman, ed., *op. cit.*, pp. 182–183; Blassingame, ed., *op. cit.*, p. 53. また、逃亡奴隷ウィリアム・ウェルズ・ブラウンは、自己の直接体験からこの問題を広く捉え、奴隷制の仕組みが奴隷主のみならず、制度の犠牲者である奴隷たちにまでも「嘘をつかせ、卑劣にさせている」点を強調している。Osofsky, ed., *op. cit.*, p. 200.
- (19) Benjamin Drew, ed., *North Side View of Slavery, the Refugee: or the Narratives of Fugitive Slaves in Canada, Related by Themselves* (Boston: John P. Jewett, 1856), p. 281.
- (20) *Ibid.*, p. 276.
- (21) Genovese, *Roll, Jordan, Roll*, p. 298.
- (22) 奴隷が自己の労働をどのように評価していたかという問題について、ジェノヴィーズは、「どんなに無知な奴隷でも、誰が作物を栽培し、利潤を産み出し、生産システムの不可欠な要素となっているのか熟知していた」とし、またウィリ・ローズは、「奴隷たちは確かに自分たち自身の経済的価値を認識していた」と述べている。*Ibid.*, p. 306; Willie Lee Rose, *Rehearsal for Reconstruction: The Port Royal Experiment* (New York: Oxford University Press, 1964), p. 110. また、自己の労働成果に対する奴隷たちの認識として、例えばエスコットは、「奴隷たちはプランテーションにおけるあらゆる物の生産者としては見返りが少なすぎるということを知っていた」と指摘している。Paul Escott, *Slavery Remembered*, p. 25.
- (23) Rawick, ed., *South Carolina Narr.*, 2(2), pp. 109–110.

- (24) Frederick Law Olmsted, *A Journey in the Seaboard Slave States* (New York: Negro Universities Press, 1968, c1856), p. 117.
- (25) Hurmence, ed., *op. cit.*, pp. 16, 115, 195; Genovese, *op. cit.*, p. 535; John B. Boles, *Black Southerners 1619–1869* (Lexington: The University Press of Kentucky, 1984), p. 89.
- (26) 菜園で生産された農産物の一部を余剰生産物として売却し、生活に必要な品物、現金等を獲得したことを示す奴隷の証言の例として、Hurmence, ed., *op. cit.*, pp. 9, 16, 75, 77, 155, 197. また、奴隷主が奴隷から購入した品目に関しては、例えば、Charles Joyner, *Down by the Riverside: A South Carolina Slave Community* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1984), p. 129.
- (27) ジャマイカにおける菜園の歴史的展開については、シドニー・ミンツ (Sidney W. Mintz) の一連の論文を始めとし、Orlando Patterson, *The Sociology of Slavery: An Analysis of the Origins, Development and Structure of Negro Slave in Jamaica* (London: Associated University Presses, 1975, c1967), pp. 216–229; Genovese, *op. cit.*, pp. 536–537 などが参考になろう。また、ジェノヴィーズは同書の中でエドワード・ロング (Edward Long) 著『ジャマイカの歴史』(*History of Jamaica*) にふれ、ロングがジャマイカでは菜園で生産された作物を奴隷たちが日曜日に自由に売却したため、奴隷が同島の現金流通の20パーセントを支配していたと見積っている、と述べている。
- (28) Lichtenstein, “Disposition to Theft,” p. 424.
- (29) Catterall, ed., *Judicial Cases*, Vol. 2, p. 113. Joyner, *op. cit.*, pp. 129–130 も参照されたい。

注 IV 食物窃取の歴史的意味

- (1) A. Sio, “Interpretations of Slavery,” p. 294.
- (2) Fogel and Engerman, *Time on the Cross*, I, p. 128. 邦訳、98頁。
- (3) 奴隷コミュニティ内部における奴隷家族の分析をこのような立場から推し進めた代表的研究としては、次のものが挙げられよう。Blassingame, *Slave Community* (1972); Rawick, *From Sundown to Sunup* (1972); Peter H. Wood, *Black Majority: Negroes in Colonial South Carolina From 1670 Through the Stono Rebellion* (New York: Alfred A. Knopf, 1974); Genovese, *Roll, Jordan, Roll* (1974); Herbert G. Gutman, *The Black Family in Slavery and Freedom, 1750–1925* (New York: Pantheon Books, 1976); Leslie Howard Owens, *This*

Species of Property: Slave Life and Culture in the Old South (New York: Oxford University Press, 1976); Webber, *Deep Like the Rivers* (1978); Escott, *Slavely Rememberd* (1979) これらの研究に共通して見られるそれ以前にはなかった新しい見方、解釈については、簡単には Al-Tony Gilmore, ed., *Revisiting Blassingame's THE SLAVE COMMUNITY The Scholars Respond* (Westport: Greenwood Press; 1978) を参照。特に pp. 17-18, 123-124.

- (4) Boles, *op. cit.*, p. 90.
- (5) Escott, *op. cit.*, pp. 81-87; Boles, *op. cit.*, pp. 90-91.
- (6) Lewis and Milton Clarke, *Narratives of the Sufferings of Lewis and Milton Clarke, Sons of a Soldier of the Revolution During a Captivity of More Than Twenty Years Among the Slaveholders of Kentucky, One of the So Called Christian States of North America* (Boston: Bela Marsh, 1846), p. 26. 本文における引用は、次の書からの再引用である。Webber, *op. cit.*, p. 96. 邦訳、169頁。類例として、Rawick, ed., *Indiana Narr.*, 6, pp. 82-83.
- (7) Rawick, ed., *South Carolina Narr.*, 2(1), pp. 2-3; Yetman, ed., *Life Under "Peculiar Institution,"* p. 304.
- (8) Philip J. Schwarz, "Gabriel's Challenge: Slaves and Crime in Late Eighteenth Century Virginia," *The Virginia Magazine*, 90 (July, 1982). p. 296; Genovese, *op. cit.*, p. 606; Yetman, ed., *op. cit.*, p. 53.
- (9) Genovese, *op. cit.*, p. 606. 鶏を盗む際の留意点に言及している証言の一例として、Yetman, ed., *op. cit.*, p. 178.
- (10) Botkin, ed., *Lay My Burden Down*, p. 46.
- (11) Schwarz, *op. cit.*, p. 296.
- (12) *Ibid.*, p. 296.
- (13) ここで言う「奴隷コミュニティ」とは、一プランテーション中にある「奴隷居住区」のことではない。複数の奴隷居住区より構成され、共通の価値観、生き方を共有することのできる統一的な組織体のことである。このように意味を明確化する必要性は、次のような事情による。すなわち、「奴隷コミュニティ」(slave community)という言葉が奴隷制史家によって使用されるようになってから、かなり久しいが、未だ明確な共通認識が得られるに至っていないように思われるのである。例えば、地理的位置を示す言葉として「奴隷居住区」(slave quarters)と同義に使われたり、また他の南部人たちとは異なる独自の文化、生活様式を持った一つの共同社会を形成する奴隷人口全体を意味したり、更には精神的なものを指し示す言葉として、共通の価値観、連帯感といった意味を持たせたりしている

- のである。Peter Kolchin, "Reevaluating the Antebellum Slave Community: A Comparative Perspective," *The Journal of American History*, 70 (December, 1983), p. 601; Webber, *op. cit.*, pp. x-xi. 邦訳、16頁。
- (14) プランテーション近隣の森林地帯や沼沢地への短期的逃亡の実態及び動機については、拙論「逃亡奴隷の史学史的検討」『新潟短期大学社会科学論集』第22号(1985年), 53-59頁で説明しているのでここではふれない。以下のものも参考になる。Larry Gara, *The Liberty Line: The Legend of the Underground Railroad* (Lexington: University of Kentucky Press, 1961), pp. 21-41; Genovese, *op. cit.*, pp. 648-657.
- (15) Rawick, ed., *Georgia Narr.*, 12(1), p. 199.
- (16) Rawick, ed., *South Carolina Narr.*, 3(4), p. 113.
- (17) Lichtenstein, *op. cit.*, p. 419; Fisk University, *Unwritten History*, pp. 11-12; Genovese, *Roll, Jordan, Roll*, p. 624.
- (18) Paul Escott, *Slavery Remembered*, pp. 20, 59. エスコットは、聞き書きコレクション全体の約3パーセントの奴隷しか奴隷主に対して真の意味での愛着、愛情を示さなかったと分析している。*Ibid.*, p. 35. また、奴隷たちの間に見られた階級意識、帰属意識、及びこの両者の相対的力関係については、*Ibid.*, pp. 59-70 を参照されたい。
- (19) Schwarz, *op. cit.*, p. 284.
- (20) *ibid.*, p. 305.
- (21) *Ibid.*, p. 293.
- (22) Kolchin, *op. cit.*, p. 581. また、pp. 579-582, 596-601 参照されたい。
- (23) Carl Degler, "Experiencing Slavery," p. 280.
- (24) Stephen C. Crawford, *Quantified Memory: A Study of the WPA and Fisk University Slave Narrative Collections*, Ph.D. Dissertation, University of Chicago, 1980, pp. 230-239; R. Fogel, *Without Consent*, p. 178. また、フォーゲルやエンガーマンをはじめとするここ20年間の奴隷制史研究者が概して国内奴隷貿易の活動を過小評価する傾向にあったのに対して、高南部から低南部への奴隷の移動において奴隷貿易の果たした役割は大であったと主張するものとして、次のものが参考になる。Michael Tadman, *Speculators and Slaves: Masters, Traders, and Slaves in the Old South* (Madison: University of Wisconsin Press, 1989)
- (25) B. Hurmence, ed., *Before Freedom*, p. 182. ちなみに、同書には随所に奴隷が売却された証言が見られる。*Ibid.*, pp. 3, 7, 12, 23, 26, 28, 28-29, 30, 31, 32,

- 39, 44, 46, 47, 60, 65, 70, 77, 80–81, 133, 138, 156–157, 176, 181, 182–183, 191, 200. また、奴隷家族が奴隷売却行為やその他の理由により崩壊の危機に直面した際、家成員がよく示した悲嘆と苦悩の表明は奴隷体験記スレイヴ・ナラティヴの重要なテーマの1つとなっている。ジュリアス・レスター著、木島 始・黄 寅秀訳『奴隷とは』（岩波書店、1970年）、45–46頁；Osofsky, ed., *op. cit.*, pp. 82, 187; Frederick Douglass, *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave* (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 1960), p. 142.
- (26) B. Drew, ed., *The Refugee*, p. 187.
- (27) Patterson, *Sociology of Slavery*, p. 222; Genovese, *op. cit.*, p. 603. サウス・カロライナにおける食物窃取の状況、歴史的展開に関しては、Lichtenstein, *op. cit.*, pp. 427–432 に詳しい。
- (28) 奴隷が家族的紐帯やコミュニティの結束性を重視し、それらに評価を置いていることを利用し、奴隷主が例えば売却による家族崩壊の恐怖を与えるなど、奴隷家族を支配統制手段として位置付けた点を分析しているものとしては、Norrence T. Jones, Jr., *Born a Child of Freedom, Yet a Slave: Mechanisms of Control and Strategies of Resistance in Antebellum South Carolina* (Hanover and London: Wesleyan University Press, 1990)